九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北部九州の前期古墳における 竪穴式石槨と葬送儀礼

辻田, 淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 准教授 : 日本考古学

https://doi.org/10.15017/16909

出版情報：史淵. 147, pp.29-57, 2010-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

北部九州の前期古墳における
竪穴式石槨と葬送儀礼

辻　田　淳一郎

１．はじめに

出現期の前方後円墳を特徴付ける構成要素の１つとして、長大な木棺と竪穴式石槨が挙げられる（近藤1983）。古墳時代前期の近畿周辺における大型前方後円墳では、長大な竪穴式石槨の中に割竹形木棺が収められる事例が一般的であり、上位層の埋葬施設としての位置づけが比較的明瞭である。これに対し、九州においては、竪穴式石槨は古墳時代になって新たに採用された、いわば「外来」の墓制であり、前方後円墳であってもそれらすべてに竪穴式石槨が採用されているわけではなく、またその規模や形態も一様でない。それ故、どのような古墳で竪穴式石槨が採用されているか、また竪穴式石槨のどのような要素がどのように選択され、採用されているかを検討することは、当該時期における地域同士の関係や、竪穴式石槨を採用した古墳の各地域社会のなかでに位置づけを考える上で有効である。そしてこの問題は、単なる墓制の問題としてだけでなく、広域的に展開した古墳時代の地域間関係の実態や各地での古墳時代の開始過程そのものを考える上で重要な意味を持つ（cf.近藤1983；都出1986・2005）。筆者はこうした観点から古墳時代前期前半の北部九州における竪穴式石槨の様相について検討している（辻田2009b、以下前稿）。その結果、各竪穴式石槨同士の共通性が少なく、系譜が異なる場合が多いことが明らかとなり、可能性としてそれぞれの地域の集団が独自に情報を入手しかつそれを複合して葬送儀礼が行われたことが想定された。さらにこの問題は、そうした葬送儀礼に関する情報が、各地域同士のみならず、各世代間でどのように継承・

共有されるのかされないのかといった問題や、外来の墓制の「在地化」といった別の問題を派生する。本稿は、以上のような問題意識の下、前稿で対象とした古墳時代前期前半の次の段階、すなわち前期後半期において竪穴式石槨がどのように選択・採用されたのかを検討し、その意義について考察することを目的とするものである。

２．問題の所在

本稿で問題としたいのは、前期前半段階において北部九州各地で採用された竪穴式石槨が、前期後半期においても同様に採用されたのか、その際例えばそれらが前期前半段階の竪穴式石槨の発展形として存在するのか、あるいは別の形で出現するのかといった問題、また各地域間での竪穴式石槨の共通性ないし差異がどのように発現しているのかといった問題である。その場合、特に前稿で詳しく触れられなかった問題として、葬送儀礼の問題との関係、すなわち埋葬頭位方向や副葬品配置と竪穴式石槨との関係、また古墳の変遷と埋葬施設との関係などが挙げられる。ここでは以上の問題意識を踏まえ、一部前稿の記述と重複するが、北部九州における竪穴式石槨の位置付けという観点から、先行研究における上記の論点について検討する[註1]。

⑴　竪穴式石槨の地域的展開をめぐる問題

本格的な竪穴式石槨研究の出発点となった小林行雄氏の研究（1941）において、竪穴式石槨が割竹形木棺を覆うための施設であることが明らかにされ、平面形の法量からＡ～Ｃの３群に区分されている。そこでは、短小なＡ群と長大なＢ群との間に、近畿を中心としてそれぞれ西・東といった地域的な偏りが存在することが論じられている。また幅広のＣ群が石棺を内包するものであることが指摘された。さらに遺物の副葬位置について、木棺の存在から棺内・棺外の空間の区別があることを明らかにし、その意味の違いに注意を喚起している。この研究は、竪穴式石槨の基本認識を生み出したという点のみならず、後述する副葬品配置研究の方向性を示している点でも重要な成果であり、ここで

示された多くの視点は現在もなお有効である。

その後、石槨基底部の構造とその変遷に着目した研究が多く提示されているが（cf. 山本 1980・1992；澤田 2009）、一方小林氏が指摘した法量等からみた地域性という視点をさらに発展させたのが都出比呂志氏の研究である（都出1986・2005）。氏は全国の竪穴式石槨の資料を集成し検討を行う中で、竪穴式石槨の方位については、近畿周辺が北頭位を志向し、中部・東海や山陽地方などでも北頭位の例が一定数確認される一方で、四国では東西方向が優位であり、また九州でも東西方向が卓越するといった地域差が存在することを明らかにしている（都出1986・2005）。さらに、竪穴式石槨の規模や木棺の型式の差などによって、被葬者の階層的位置づけを表示する「棺制」の成立を読み取っている。この都出氏の視点は、次に述べるその後の北部九州における前期古墳の埋葬施設研究にも大きな影響を与えている。

北部九州において竪穴式石槨は、小田富士雄氏の研究（1966・1970・1986）をはじめとして、「畿内型古墳」の指標の１つとされ、北部九州各地の最上位の前期古墳で採用される埋葬施設としての位置付けがなされてきた。その後、北部九州の前期古墳については、埋葬施設の種類の違いや葬送儀礼の諸要素との関係から階層性を論じる研究が行われている。吉留秀敏氏は、北部九州の割竹形木棺において28cmを基準尺度とした規格性が存在し、これが近畿の埋葬施設においても共通して認められること、さらに北部九州では特に福岡平野・筑紫地域・津屋崎-宗像地域の３地域を中心として採用された可能性を論じている（吉留1989）。またこの中で氏は、割竹形木棺が古墳時代前期に新たに出現した埋葬施設であり、規格性も含めてそれを北部九州において広く流通させた主体を福岡平野周辺地域の首長層に求めている。さらに吉留氏は、竪穴式石槨がこれら３地域では殆どみられないことから、割竹形木棺の規格における序列と竪穴式石槨との有無とは「別の位相」にある可能性についても指摘している（吉留前掲）。また組合式箱形木棺・箱式石棺など他の埋葬施設についても検討し、割竹形木棺と竪穴式石槨を持つ古墳が階層的に最上位に位置づけられるとともに、割竹形木棺は墳丘規模の小さな古墳まで幅広く共有されているこ

とを明らかにした（吉留1990）。氏が一連の研究の中で、特に割竹形木棺の序列化が顕著な地域が限定されること、またその３地域では竪穴式石槨の採用が明確でなく、かつ両者が別の位相を示すことを指摘している点は、竪穴式石槨の採用がどのような地域において行なわれたのかを考える上で重要である。

北條芳隆氏はこの吉留氏の研究を踏まえ、北部九州地域の主要前期古墳の埋葬施設・頭位方向・副葬品配置について検討し、本地域では、長さ３ｍほどで直径１ｍを超す幅広型の割竹形木棺（吉留氏分類のＢ型）をもち、頭位方向において東西・南北の正方位から45度振れる一群が上位に位置づけられることを指摘するとともに、これらを在地的特徴とする観点からいわゆる派遣将軍説への反証として挙げている（北條1990）。吉留氏は北條氏の検討結果に一部修正を加え、また時間的変化を加味した上で、前期前半においては長大型の割竹形木棺（氏のＡ・Ｃ型）が上位に位置づけられていたが、前期後半になると幅広型（氏のＢ型）の割竹形木棺が上位になるといった変化がみられることを指摘している（吉留 1991）。このうち前期後半のＢ型・幅広型については、福岡県一貴山銚子塚古墳や佐賀県谷口古墳などが含まれているが、特に谷口古墳は長持形石棺を有することからＢ型割竹形木棺や「在地的」という脈絡で論ずることができるかについては検討の余地があると考える。

以上のように、北部九州においても竪穴式石槨が上位層の埋葬施設として位置づけられてきている一方で、吉留氏が指摘したような地域差を考慮した場合、竪穴式石槨の各地での採用に関して北部九州の上位層全体としてどの程度の共通認識が存在したのかという点については具体的に検証する必要があろう。

⑵　副葬品配置に関する研究動向と竪穴式石槨

前期古墳の埋葬施設における副葬品配置の研究は、先に挙げた小林行雄氏（1941）による棺内・棺外空間の意味づけの違いに関する認識を出発点としている。1970年代～1980年代にかけては、鏡の副葬位置の違いに関する問題意識（例：森1978；菅谷1980）や、副葬品目による意味づけの違い、地域間での政

治的関係の強弱といった視点（寺沢1979）、さらに、使用品・奉献品といった副葬品の性格の違い（用田 1980）などからその意義が論じられている。また今尾文昭氏（1984）は、棺内・棺外・槨外や被葬者との位置関係から副葬位置の違いについて、埋葬施設の構築段階との関係から、副葬品の「対置」と「反復」による結果であるとし、より複雑なものが近畿周辺に集中する一方、各地では地域性の発現がみられることを明らかにした。その後、各副葬品目ごとに多くの検討が進められているが、特に本稿でも取り上げる鏡に関しては、副葬配置パターンの違いが近畿の鏡配布主体の差に起因するといった藤田和尊氏の研究（1993）や、古墳時代に成立した鏡配置パターンが近畿周辺では高い共通性の下で共有されるとともに、埋葬施設の変化と連動するように時期的に変化し、また地域的にも差異がみられることを明らかにした福永伸哉氏の研究（1995・1999）、さらに配置形態の細分を行いつつ地域的・時期的変遷を整理した岩本崇氏の研究（2004）などが挙げられる。また光本順氏（2001）は、被葬者の身体各部の象徴性から副葬品配置を読み解く試みを行っている。

こうした先行研究を踏まえつつここで確認しておきたいのは、本稿の課題である北部九州における竪穴式石槨の導入・採用との関係である。この問題については、すでに先に挙げた北條芳隆氏の研究（1990）において、副葬品配置とあわせて検討が行われている。北條氏は棺内・棺外に遺物を分ける１類（＋1’類：基本は１類と同じで、鏡を棺外に、鉄器を槨外に置くなどしたもの）と、棺内にのみ遺物を副葬する２類に大別し、１類と２類の差が墳形や規模の違いと明確な相関を示さないことから、「この要素は首長間の階層差と直接対応するのではなく、副葬品の内容自体と密接に関係して個別首長墓の中枢地域や近接地域との系列関係を反映する可能性がある」（p.63）ことを論じている。この１類は近畿周辺の上位層にみられる配置であるが、北條氏は、頭位方向において正方位（南北・東西のいずれか）を志向する一群がすべて１類を採用することを指摘するとともに、他の要素とも連動した諸特徴を示す地域として、「讃岐」地域を挙げている（p.65）。北條氏の視点は、竪穴式石槨の採用にあたって、埋葬施設以外の葬送儀礼のいわば「ソフトウェア」の面（土生田1998）がどの

ような形で取り入れられたかを考える上で重要であり、本稿でも各地での竪穴式石槨の採用との関係という観点からあらためて検討を行う。

⑶　同一地域内での埋葬施設の変遷に関する視点

北部九州の前期後半期の竪穴式石槨の変遷を考える上でもう１つ問題となるのは、時間的変化が進行する中で、埋葬施設がどのように変化したか、また同一地域や同一古墳群内では同一種類の埋葬施設が世代を引き継いで採用されるのかといった問題である。初期横穴式石室・竪穴系横口式石室の展開に関しては従来より系譜的・連続的変化の過程が明らかにされているが（例：小田1980；柳沢1982など)、同様の図式が前期古墳の埋葬施設においても適用可能であるかという点が問題となろう。また重藤輝行氏・西健一郎氏は先に挙げた吉留氏・北條氏らの研究を踏まえ、東北部九州の埋葬施設の変遷と階層性について検討している。その結果、上位層によって採用された埋葬施設が下位層によって模倣され、時間的な進行とともに普及していく過程が具体的に明らかにされている（重藤・西1995)。この上位層の埋葬施設の下位層による模倣という視点は、特に横穴式石室出現以降の北部九州においてはその後も検証が積み重ねられている（重藤2007)。一方でこれらの論考の中では、前期の竪穴式石槨については資料数の少なさから割竹形木棺と同列に扱われており、これについては先述の吉留氏が指摘した地域差（吉留1989）の問題なども加味して考える必要がある。

また前期古墳における世代間での埋葬施設の変遷という問題については、同一古墳群内での変遷という観点から検討した藤井康隆氏の研究（藤井2001）が参考となる。氏は、京都府寺戸大塚古墳を含む向日丘陵の前期古墳の築造において、前方後円墳の築造が時期的に連続するにもかかわらず、寺戸大塚古墳に後続する妙見山古墳では組合式石棺が採用されるなど、必ずしも世代間で同一埋葬施設が継承されるとは限らず、そのときどきの最新の情報をもとに新たな埋葬施設が採用されることを論じている（p.143)。藤井氏の指摘は、北部九州において前期前半に採用された竪穴式石槨がどのように「在地化」するのかし

ないのか、また前期後半期においてはどのような石槨がどのような形で採用されるかを考える上で重要な示唆を含んでいるといえよう。

⑷　問題の所在：本稿の課題

以上を踏まえ、ここで前稿で検討した前期前半における竪穴式石槨の問題についてみておきたい。事例として取り上げたのは、佐賀県久里双水古墳・福岡県忠隈１号墳・同神蔵古墳・同石塚山古墳・大分県下原古墳の５基である。このほかに前期前半に遡る可能性がある資料も存在するが、現状において確実なこれらの資料についてまず検討を行った。その結果、概ね各地域に１基程度の分布であること、現状では福岡平野周辺の状況が不明確であることを確認した。そして前期前半（Ⅰ期・Ⅱ期）段階での竪穴式石槨の導入・採用にあたっては、相互に共通性が希薄であり、かつそれぞれの系譜が各々別のものと想定されることから、少なくとも竪穴式石槨に関してはどこか１つの特定地域に共通した規範が導入されそれが共有されたり拡散したというような状況ではなく、むしろそれぞれの地域で独自に入手された情報のもと、複数の情報を複合する形で最終的に古墳として表現された可能性が想定された。

本稿では、北部九州の古墳時代前期前半の状況及び先にみた先行研究の成果を踏まえ、前期後半段階、特にⅢ期の具体例について検討する。その場合問題となるのは次の３点である：①北部九州内の各地の竪穴式石槨において、共通性がどの程度みられるのか、②同一地域内、あるいは近接した地域同士の間で、前期前半代からの系譜的連続性を追うことが可能か、③それぞれの竪穴式石槨の構築技術等についての系譜がどこに求められるのか。特に②については葬送儀礼に関する情報が各世代間でどの程度受け継がれたのかといった問題に関するものであり、また③を考える上では埋葬施設そのものだけでなく、先にみた頭位方向や副葬品配置といった葬送儀礼の内容の問題とも深く関わってこよう。以下、具体的に検討したい。

３．分析

⑴　資料と方法

本稿が対象とするのは、前稿で扱った前期前半に後続する前期後半期の竪穴式石槨を有する古墳である。資料については後述することとし、先に方法について述べておきたい。

本稿では、前稿でみたような、各竪穴式石槨の属性及びその組合せを比較する。対象とする属性は次の通りである：①墓壙基底部構造、②粘土床および木棺の形態、③壁体構築技法（垂直／持ち送り、石材の大きさ等）、④壁体の裏込め、壁体と墓壙の間をどのように埋めるか、⑤石槨内法における長幅比、⑥天井部の被覆方法（天井石の有無、粘土による被覆など）。さらに、葬送儀礼の問題として、⑦埋葬施設主軸および方位と墳丘主軸との関係性、⑧副葬品配置の２点を挙げる。このうち⑦の埋葬頭位については、北條氏の分類：正方位／45°正方位振れの区分を用い、前方後円墳の場合は墳丘主軸との関係についても検討する。

また副葬品配置に関しては、先にみた先行研究を踏まえ、棺内・棺外空間を区分する分類を行う。先に挙げた北條氏（1990）の副葬品配置分類では、鏡の副葬配置と副葬品配置全体を含めて分類されているが、鏡の副葬配置パターンが地域的特徴を示す傾向がつよく、鏡以外にも腕輪形石製品（清家1996）や刀剣類（宇垣1997）などにあるように、個々の副葬品目ごとに特徴的な配置パターンが確認できる場合が多いことから、それらを包括する副葬品配置全体と、そしてここでは特に鏡の配置パターンを区分して検討したい。副葬品配置全体の分類としては、Ａ類（副葬品を棺内と棺外の空間に分けて配置し、棺内には原則的に玉類＋鏡のみを置くもので、近畿周辺に集中する）とＢ類（多種の副葬品を全て棺内に配置するもの）の２種に区分する[註2]。また鏡の副葬配置に関しては、藤田氏（1993）の頭足分離型・頭部集中型の２種の分類から、頭部を包囲した配置（福永1995）や棺内・棺外の区分を付加した分類（岩本2004）など細分化が進んでいるが、そうした先行研究を踏まえつつ、ここで

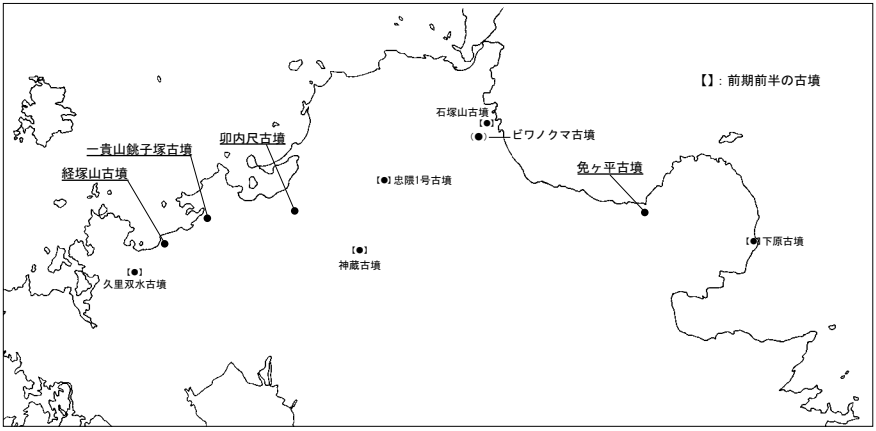

図１　北部九州における竪穴式石槨を有する古墳の分布（Ⅰ～Ⅲ期）

は複数面の鏡を副葬する出土状況の事例から実際に有効と考える分類として、「棺内棺外分離配置」・「棺内頭足分離配置」・「棺内集中配置」・「副葬品埋置用別施設」の４種類の区分を提示しておきたい。従来から指摘されているように、三角縁神獣鏡は、棺内棺外分離配置では棺外に、棺内頭足分離配置では足方向に副葬される場合が多く、かつそうした配置は近畿を中心として集中的に分布している（cf.福永1995；岩本2004）。

また時期区分については前稿と同様に、前期古墳を主に三角縁神獣鏡の編年を基準として大きくⅠ～Ⅳ期に区分する。Ⅰ・Ⅱ期が前期前半、Ⅲ・Ⅳ期が前期後半であるが、本稿で扱うのはそのうちのⅢ期であり、福永氏の仿製三角縁神獣鏡編年（1994）のⅠ型式～Ⅲ型式に該当する。そのうち、氏のⅡ－ｂ～Ⅲ－ａ・ｂ型式を含む場合をⅢ期の新相として区分している。

以上の編年観の下に、北部九州の前期古墳の事例のうち、前期後半、特にⅢ期の例として挙げられるのは、佐賀県経塚山古墳、福岡県一貴山銚子塚古墳、同卯内尺古墳、大分県免ヶ平古墳第１主体である（図１）。また福岡県ビワノクマ古墳の事例が前期中葉前後の事例として挙げられる。以下、これらの５例について西から順に検討する。

⑵　Ⅲ期における竪穴式石槨の具体例

①　佐賀県経塚山古墳（浜玉町教育委員会1980）

唐津平野の東北部に位置する。標高約50mの丘陵端上に作られた径27mの円墳で、主体部に竪穴式石槨を用いている。江戸時代に墓地として利用されていたことにより大きく攪乱を受けている。墓壙は6.1m×４mで、２基の棺床を設置しようとした形跡があるが、後述するように竪穴式石槨が構築されたのは南東側の棺のみである（図２）。南東側の木棺は長さ4.15m、幅0.7mで、断面Ｕ字形の粘土床を持つことから割竹形木棺と想定されている。石槨内法は長さ4.9m×幅東0.95m（西0.8m）で高さは東で0.8mである。南東石槨の北隅の壁体中から魏晋の方格Ｔ字鏡（14.8cm、松浦宥一郎氏分類(1994)のMC式）と鉄剣片が出土しており、埋葬施設の構築過程における副葬品の配置を考える上で重要な事例である。竪穴式石槨の壁体の中に鏡を挟み込んだ事例はその後も類例は増えていないが、京都府寺戸大塚古墳前方部竪穴式石槨の再調査において、石槨内で新たに出土した鉄器や銅鏃などが床面から遊離した位置で出土していることから元来壁体に挟み込まれていた可能性が指摘されており（㈶向日市埋蔵文化財センター2001）、また粘土棺床断ち割りの際に粘土内から鉄剣等が出土するなど、埋葬施設の一部に副葬品を「封入」する事例との共通性を読み取ることができよう[註3]。

主体部（南東棺）は墓壙を１段掘りくぼめた上に粘土床を設けている。石槨壁体は玄武岩の割石を用いている。やや内傾するが、裏込めには主として粘土を用いている。天井石には花崗岩の自然石を利用しており、１枚のみ残存が確認されている。主体部の主軸は北條氏（1990）の分類でいう45°正方位振れ軸指向型である。北西棺については同一墓壙内に南東棺と同様に１段深い掘り込みを設けているが粘土棺床は敷設しておらず、実際には棺の搬入も含めた埋葬行為は行われなかったものと想定されている。ただし、同一墓壙内に２つの棺を設置するスペースを当初から用意している点では、いわゆる墳丘併葬や追葬の出現を考える上でも重要な事例といえよう。蒲原宏行氏は本古墳の事例について、こうした「追葬への欲求」ともとれるあり方が、谷口古墳のような竪穴

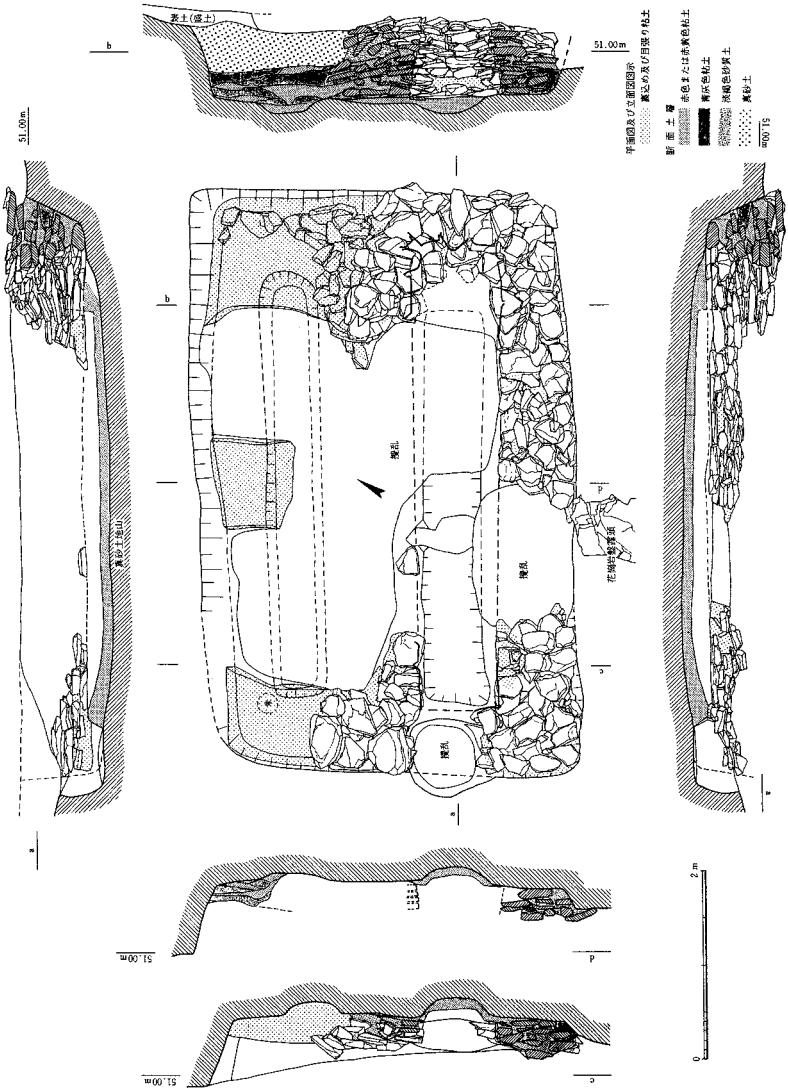

図２　経塚山古墳の竪穴式石槨実測図（1/80）

系横口式石室を生み出した可能性を指摘している（蒲原1983）。

時期については、竪穴式石槨の基底部が都出氏分類でいうSC式にあたり、かつ方格Ｔ字鏡を副葬することから、前期後半段階でかつ谷口古墳に先行する時期と捉えⅢ期に位置づけられる。本古墳について問題となるのは、前期前半代の久里双水古墳との系譜的連続性である。単一の古墳築造系列と考えられるかどうかは別として、近接する地域内でどの程度連続性がみられるかを考える上では、北部九州の中では貴重な事例といえる。これについては後述したい。

② 福岡県一貴山銚子塚古墳（小林行雄他1952）

前方部を北に向けた103mの前方後円墳であり、この時期の北部九州で最大規模となる。先行研究において、在地的な様相と近畿的な様相を併せ持つことが論じられる一方で、前後の歴史的脈絡の中での意義づけが明確になっていない古墳である。埋葬施設は、内法3.4×1.4mの竪穴式石槨内に、広い底板を置きその上に長側壁・短側壁を組み合わせて蓋板を載せる組合式木棺が収められたと復元されている（小林他 1952：図３）。割竹形木棺を設置する場合に北部九州でも一般的にみられる粘土棺床を敷設した痕跡が認められないことからも、こうした組合式木棺が使用された可能性は十分考えられる。またいわゆる天井石はもたず、壁体が黒雲母花崗岩であるのに対し、天井は中の木棺の天井構造から支えられつつ、玄武岩の角礫によって全体を被覆したと復元されている（同上）。棺外に副葬された鏡の上面下面のいずれからも棺材とおぼしき木質が検出されており、木棺の形態を復元する上での根拠となっている。また人骨の出土も確認されている（頭骨片・寛骨）。埋葬施設の主軸は墳丘の主軸に対し斜交しており、これは主体部の軸が45°正方位振れ軸指向型であることを優先した結果である可能性が高い（北條1990）。また副葬品配置は棺内には基本的に玉類のみであることからＡ類であり、また鏡の副葬配置は仿製三角縁神獣鏡を棺外に配置していることから、棺内棺外分離配置の一類型として理解できよう。

研究史でも触れたように、木棺の形態を幅広のＢ型割竹形木棺と捉えるか

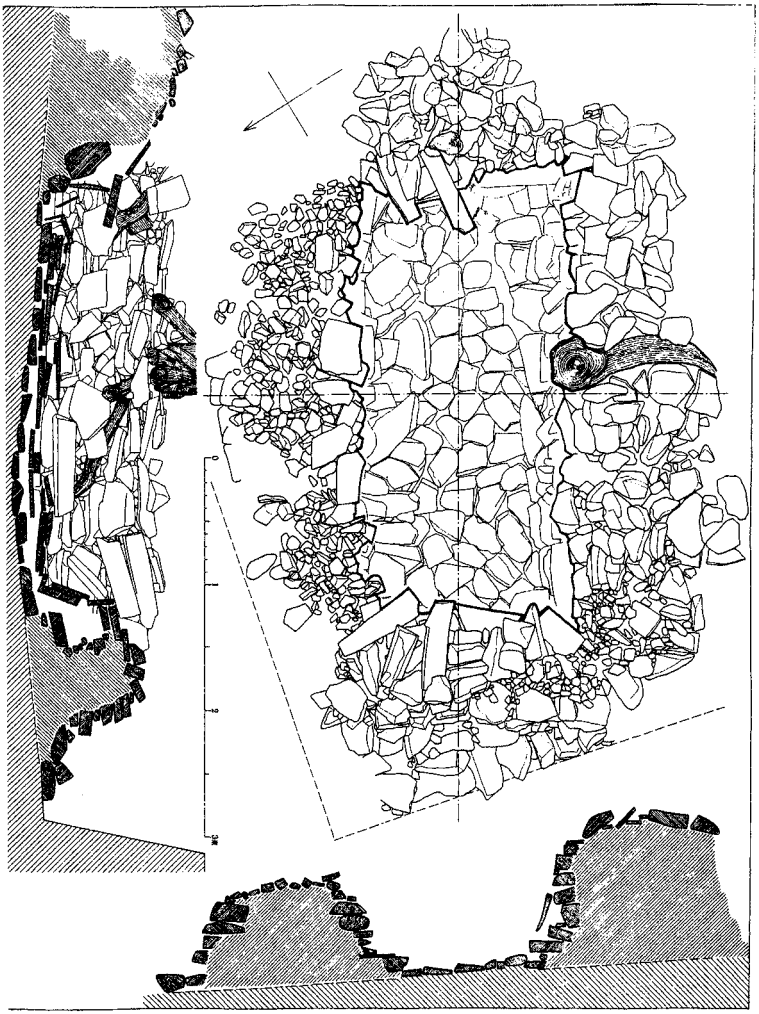

図３　一貴山銚子塚古墳の竪穴式石槨実測図（1/60）

(cf.吉留1989、北條1990)、あるいは組合式木棺と捉えるか（小林他1952）によって本古墳の評価は異なるものとなる。また仮に後者の組合式木棺とした場合にも、どのような組合式木棺で系譜はどのように説明されるのかという点が

問題となる。これについては後論する。時期は、仿製三角縁神獣鏡に福永編年Ⅲ型式を含むことから、Ⅲ期新相と位置づけられる。

③　福岡県卯内尺古墳（福岡市教育委員会2001）

老司古墳に隣接する前方後円墳で、墳丘規模は73～78mと推定されている。明治20年（1887）以前に埋葬施設の発掘が行われており、その記録について報告者の吉留秀敏氏により詳細な検討が行われている。また墳丘確認の発掘調査により二重口縁・単口縁の壷形埴輪が出土している。

埋葬施設の発掘の記録は、江藤正澄著『福陵雑纂』の中の「古鏡の記」である。その中では、墳丘頂部の埋葬施設と思われる記述として、「一尺四方程の石」（「重きこと常ならず」）が置かれ、「その下に小石を三段に重ね、幅壱尺三寸、高さ五寸ばかりの湿気抜きとおぼしきものをもうけたり。またその下四尺ばかりにその古鏡を埋む」とあり、幅40cm、深さ15cmの範囲に「小石」で三段に積まれた「湿気抜き」状の施設がみられたことが指摘されている（福岡市教委2001：pp.29-34）。

従来卯内尺古墳の主体部については粘土槨などの可能性が想定されていたが、吉留氏は上記の記述および墳丘覆土や残丘周辺で採集された厚さ７cm前後の玄武岩板石の存在から、竪穴式石槨の可能性を指摘している（同）。その場合、全体の長さについては不明であるが、天井石を有し、鏡の副葬された面からの高さが120～135cmの竪穴式石槨となる。北部九州の類例と比較すれば、後述する福岡県ビワノクマ古墳の1.7mよりは低いものの、福岡県忠隈１号墳の1.1mよりもさらに高い壁体をもつことから、竪穴式石槨であるとすれば比較的大型の部類に属すると考えられる。また壁体の上部の幅が40cmとすれば持ち送りの強い形態であった可能性が高い。

本古墳の時期については、出土した可能性が指摘されている仿製三角縁神獣鏡の年代（福永編年Ⅰ－ｃ型式）と銅鏃の形態からⅢ期に位置づけられる。

④　大分県免ヶ平古墳（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1986・1991）

大分県宇佐市の川部・高森古墳群の最南端に位置する墳丘長50mの前方後円墳である。後円部では竪穴式石槨の第１主体と箱式石棺の第２主体の２基が出土している。箱式石棺からは女性人骨が出土している。第１主体からは人骨の出土はないが、碧玉製石釧が腕部位置に副葬されていることから、こちらも女性被葬者の可能性が高い（清家1996）。すなわち、女性被葬者が２体併葬されたと想定される事例である。

第１主体は割竹形木棺を竪穴式石槨で覆ったものであり、墓壙全体の規模は東西7.7m、南北5.6mである。粘土床基底部には拳大よりやや大きめの礫を40cm前後の厚さで積んだ後、断面Ｕ字形の粘土床を設置している（都出氏分類のSB-1式：図４）。壁体の構築は粘土床設置後であり、かつ壁体を構成する石材の組み合わせから、頭位方向と推測される東側の短側壁を積んだ後に両長側壁を積み、そして最後に西側の短側壁を積んだものと推測されている（1986：p.19）。壁体は安山岩の扁平板石を使用しており、ほぼ垂直に立ち上がる。内法の長軸は4.95～5.05m、幅が0.9～1.0m、高さは東壁が0.97m、西側が0.85mである。天井石は５枚の安山岩の板石を用いている。控え積み基底部の幅は、長側壁で1.1m、短側壁で0.8～１ｍで、基底部には小円礫が敷き詰められている。またその周囲には栗石が巡らされている。

埋葬施設の主軸は墳丘主軸と直交するが、頭位方向は東で主軸を東西の正方位に取る点で北部九州では少数派に属する（北條1990）。副葬品は、棺内より碧玉製石釧３点と玉類が、棺外では斜縁神獣鏡・仿製三角縁神獣鏡が各１面ずつ、それぞれ南側壁・北側壁の壁体に立てかけるように配置されていた。そのほか鉄製武器類・農工具類が棺外より出土している。以上より副葬品配置はＡ類であり、仿製三角縁神獣鏡を棺外に配置していることから、鏡の配置は棺内棺外分離配置に則ったものとみられる。

南側（前方部側）に隣接した箱式石棺は安山岩板石を組み合わせたもので内法長1.96m、幅0.55～0.47m、深さ0.65mである。ここからも碧玉製石釧２点と斜縁神獣鏡１面が出土しており、第１主体の被葬者と同種の副葬品を「分有」

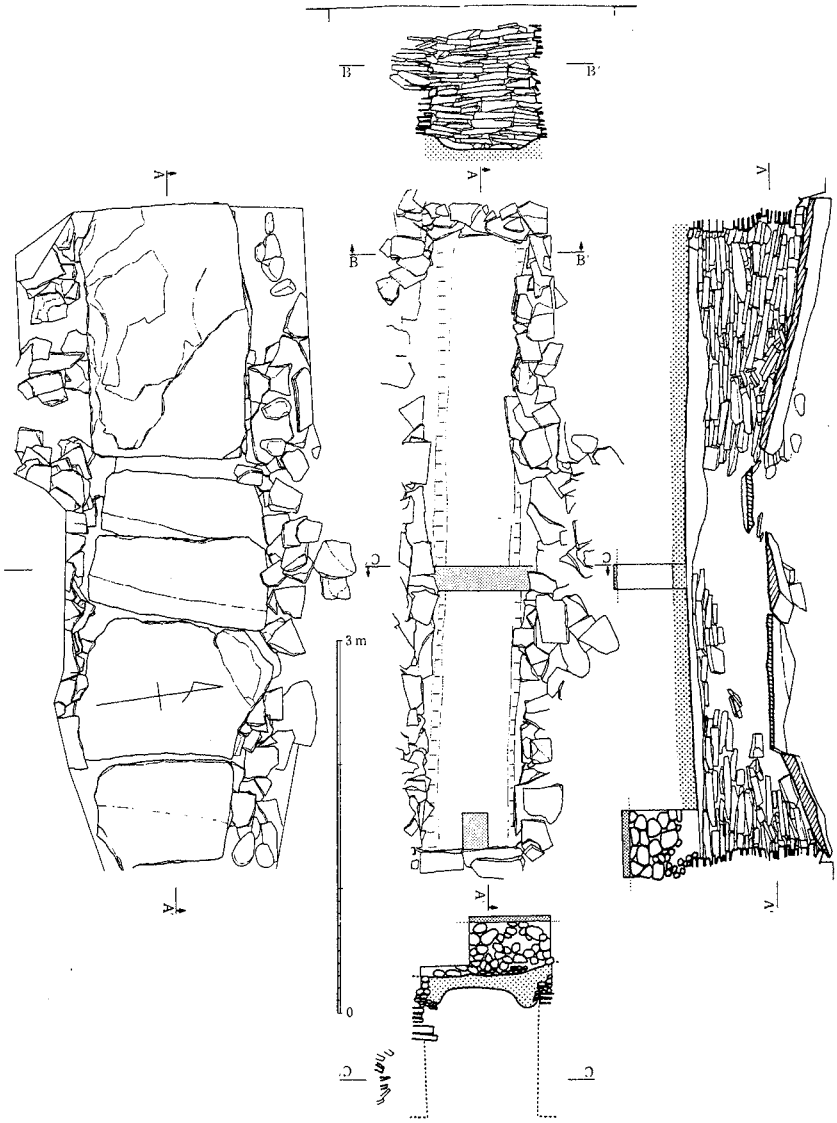

図４　免ヶ平古墳の竪穴式石槨実測図（1/60）

していた可能性が考えられる（辻田2007a・2009a）。

本古墳の第１主体は、長大型の竪穴式石槨・割竹形木棺に近畿周辺での葬送儀礼がセットで採用されている点で重要である。このうち、埋葬頭位が東西正方位である点は、北條氏（1990）が指摘するように四国東北部（「讃岐」）などとの関係を伺わせる事例といえよう。時期は仿製三角縁神獣鏡がⅡ－ａ型式でありⅢ期に位置づけられる。前期前半に築造された赤塚古墳の主体部が箱式石棺と報告されており（梅原1923；小田1986）、主体部の採用・選択においても時期的な変遷が認められる。

⑤　福岡県ビワノクマ古墳（鏡山1959；山中2005）[註4]

本古墳は、福岡県行橋市に所在する。従来25mの円墳とされていたが、近年墳丘そのものの再調査が行われ、現在も継続して調査が進められている。

後円部墳頂から竪穴式石槨が検出されている。石槨内法は長さ3.94m、幅約1.32m、高さ1.7mとされており（山中2005）、幅広でかつ壁体の高さが高い点が特徴といえる（図５）。粘土床は四周が棚状になると報告されている。現地で確認する限り、壁体は持ち送りが強く天井部の幅は狭いもので、天井石を架構する。石材は花崗岩が確認できる。副葬品として、銅鏡や鞆、環頭大刀、鉄鏃、そして小札による甲（札甲）が出土している。棺内出土品が主体のようで

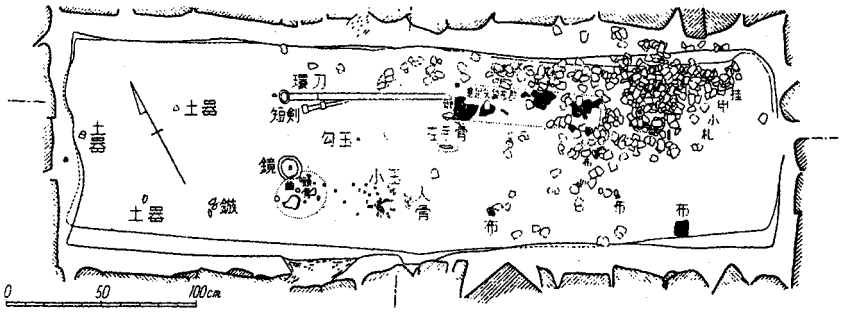

図５　ビワノクマ古墳の竪穴式石槨実測図（1/40）

あり、B類に該当する。主体部の主軸は45°正方位振れ軸指向型である。

本古墳の時期については、出土遺物等が未報告のため厳密には確定できないが、鉄製札甲の類例などから前期に属する可能性が高い（重藤・西1995；橋本1996）。ここでは参考資料として扱っておきたい。

またそれ以外の資料で１件追加しておきたい。前稿（辻田2009b）で言及した資料以外で竪穴式石槨の可能性が指摘されている資料として、福岡市西区の山ノ鼻１号墳がある（福岡市教委1992）。これについては報告書中で玄武岩板石の存在から竪穴式石槨の存在が想定されているが、小口板状に残存する板石や現地でみられる玄武岩石材の薄さ・大きさなどから、箱式石棺などの可能性も考えられる。これについても参考資料としておきたい。

⑶　北部九州における前期後半期の竪穴式石槨の系譜

前項では５基の竪穴式石槨について検討した。このうち参考資料として挙げたビワノクマ古墳以外の４基については、基本的にすべて「Ⅲ期」の時期幅の中で捉えられる資料である。一貴山銚子塚古墳は仿製三角縁神獣鏡からⅢ期の中でも新相と考えているが、ここでは「Ⅲ期」という時期幅の中での同時期の所産として検討を行う。ここではまずそれぞれの石槨の系譜についてみた上で、分布の問題、また前段階からの連続性／非連続性について検討する。

表１は先に挙げた属性について、前稿で対象とした前期前半の資料（Ⅰ・Ⅱ期）も含めて内容を示したものである。前期前半の資料については、前稿で扱わなかった副葬品配置・頭位方向についての項目を追加した。

まず①の経塚山古墳については、石槨内法の長幅比が約5.0で長大型に属する。粘土床の形態は前期前半の久里双水古墳の舟底状粘土床とは全く異なり近畿周辺で一般的にみられるものであり、この段階で新たに参照・採用されたものとみられる。裏込めが粘土で本来の控え積みを簡略化したものという指摘（田平1980）から、在地的な変容の所産と捉えることができよう。

②の一貴山銚子塚古墳については、石槨の内法だけみれば幅広型になるが、仮に小林行雄氏（1952）が復元したような底板の上に４枚の棺材を組み合わせ

表１　竪穴式石槨属性一覧表

	古墳名	時期	墳形・規模	①墓壙基底部	②粘土床・木棺形態	③壁体構築技法	④壁体裏込め	⑤長幅比	⑥天井部被覆方法	⑦埋葬頭位	⑧副葬品配置	⑨頭足幅	⑩頭足高さ
唐津	久里双水	Ⅰ期新相	方円・90	粘土床	舟底状・舟形木棺	ほぼ垂直	土	2.9	天井石＋粘土被覆	45°正方位振れ	B類？	ほぼ同	——
	経塚山	Ⅲ期	円・27	１段低く掘りくぼめる	U字形・割竹形木棺	やや内傾	粘土	5	天井石	45°正方位振れ	——	頭広	頭高？
糸島	一貴山銚子塚	Ⅲ期新相	方円・103	石材のみ	組合式木棺	ほぼ垂直	石材	2.4	角礫	45°正方位振れ	A類・棺内棺外分離配置	ほぼ同	頭高？
福岡	卯内尺	Ⅲ期	方円・73～78	——	——	持ち送り？	——	——	——	——	——	——	——
筑後川中流域	神蔵	Ⅰ期	方円・40以上	構築墓壙	箱形木棺	——	——	2.6	木製蓋	45°正方位振れ	B類	頭広？	ほぼ同
遠賀川中流域	忠隈	Ⅱ期	円・42	粘土床	平坦・舟形木棺	垂直	礫	5.4	天井石＋粘土被覆	45°正方位振れ	B類	——	頭高？
周防灘沿岸北部	石塚山	Ⅰ期新相	方円・130以上	（粘土床）	——	持ち送り	石材	5.4	天井石	45°正方位振れ	——	——	——
	ビワノクマ	Ⅱ～Ⅲ期？		粘土床		持ち送り	——	3.2	天井石	45°正方位振れ	B類	ほぼ同	——
宇佐	免ヶ平	Ⅲ期	方円・50	礫＋粘土床（都出SB-1式）	割竹形木棺	垂直	——	5	天井石	東西	A類・棺内棺外分離配置	頭広？	ほぼ同
国東	下原	Ⅰ期	方円・25未満	１段低く掘りくぼめる	箱形木棺	垂直？	礫	2.8	——	45°正方位振れ	——	ほぼ同	ほぼ同

た組合式木棺であるとすれば、同じⅢ期の時期幅で捉えられる大阪府松岳山古墳や京都府妙見山古墳、山梨県大丸山古墳などの組合式石棺との共通性が指摘できる。このことがもつ意義については別稿を準備中でありあらためて論じたいが、ここで予察的に述べておくならば、形態的な特徴からみて、この時期の近畿地方における最上位の埋葬施設としての組合式石棺（＋竪穴式石槨）を木棺という形で導入している可能性がある。副葬品配置においてＡ類・棺内棺外分離配置（かつ頭部包囲型の配置）を採用している点もこの想定と矛盾しない。すなわち、近畿上位層の埋葬施設＋副葬品配置の方式がセットで採用されているとみられるのである。

③の卯内尺古墳については、仮に竪穴式石槨であるならば持ち送りの強い形態であった可能性が想定されるが、これについては不確定要素が多く、系譜については保留せざるを得ない。

④の免ヶ平古墳は、長大型で垂直の壁体を有する。長幅比は約5.0で経塚山古墳に近い数値である。副葬品配置・頭位方向から東部瀬戸内～近畿に系譜が求められる。本古墳については、一貴山銚子塚古墳と同様、埋葬施設の形態と副葬品配置の方式がセットとして有機的に結びついていると考えられる点が重要であろう。

参考資料とした⑤のビワノクマ古墳は、長幅比約3.2と幅広型で、持ち送りが強いタイプである。長幅比だけでみると前期前半の神蔵古墳（長幅比2.6）などが想起される。また壁体の高さが1.7mある点でも九州においては特異な事例といえる。木棺形態も含めて、系譜については今後の課題としておきたい。

⑷　竪穴式石槨の諸属性における共通性と多様性

次に石槨の各属性について検討する（表１）。都出比呂志氏は、〔石塚山古墳と免ヶ平古墳〕、また〔忠隈１号墳と経塚山古墳〕の長幅比がそれぞれ共通すると指摘している（都出1986：pp.11-15）。この指摘を踏まえ、石塚山古墳の石槨について吉留氏の指摘（1991）に依拠しつつ幅を狭く想定した前稿の結果にもとづき再度検討を行った。その結果、石塚山古墳（Ⅰ期新相）が5.4、免ヶ平古墳（Ⅲ期）が5.0、忠隈１号墳（Ⅱ期）が5.4、経塚山古墳（Ⅲ期）の石槨内法が5.0となり、実際の組合せとしては、【前期前半の石塚山古墳と忠隈1号墳】、また【前期後半（Ⅲ期）の経塚山古墳と免ヶ平古墳】というように、時期ごとに長幅比が共通することがわかった。ただし前稿でも指摘したように、石塚山古墳の壁体は持ち送りが顕著で逆に忠隈１号墳はほぼ垂直といった違いがあること、またこの場合の長幅比が石槨内法によるものであり、棺の長さ、幅という点からみた場合に同様の認識が可能かという点も含め、この共通性が相互のつながりを示すとみなせるかについてはなお検討を要する。

その一方で前稿でも指摘したように、墓壙底部に棺台をつくり出す系列は存在しない。また北條氏（1990）が指摘する頭位方向が45°振れ軸を志向するといった共通性は認められる。そして現状で確実に排水施設を伴うものがみられない点も共通した特徴として挙げられる[註5]。このようなあり方は、属性によっ

て共有のあり方にレベル差が存在することを示している。具体的には、墳丘に対する埋葬施設の主軸や埋葬の頭位、墓壙・埋葬施設の基底部といった埋葬施設構築における初期の工程に関しては比較的共通性が高く、その中に造られた埋葬施設本体については自由度が高かった結果、多様なものが生み出された可能性を想定することもできよう。

その上であらためて分布をみると（図１）、前期前半と比べて特に福岡平野・糸島地域周辺に竪穴式石槨を有する相対的に大型の前方後円墳が造営されている点が特徴として挙げられる。この中でも、Ⅲ期の北部九州において最大規模となる一貴山銚子塚古墳において近畿とのつながりが強い棺・槨・副葬品配置が採用されている点が特筆されよう。

また同一地域での地域性、あるいは前期前半段階との連続性については、〔唐津地域の久里双水古墳と経塚山古墳〕、〔周防灘沿岸の石塚山古墳とビワノクマ古墳〕が問題となろう。前者の唐津地域の２基は、河川の水系も異なっており単一の古墳築造系列とはみなされないが（cf. 辻田2009c）、そのこととも符合するように、竪穴式石槨の構築技術・平面プランのいずれにおいても連続性は認められず、相互の関連性は低いといえる。また後者の石塚山古墳とビワノクマ古墳については時期の問題もあり確定的ではないが、長幅比においては大きな差異がみられる。ただし壁体の持ち送りなどについては共通性が認められる。また同じ周防灘沿岸に位置する免ヶ平古墳の壁体は垂直であり、石塚山古墳・ビワノクマ古墳のいずれとも異なっている[註6]。このような属性ごとの複雑な状況からすれば、石槨の構築技術そのものに関しては、各地の古墳相互の共通性よりも、各地の古墳の独自性が基本であり、その中に共通した属性がみられる場合がある、というのが実態であったものと想定される。

⑸　小結

以上、Ⅲ期の竪穴式石槨の系譜と分布について検討を行ってきた。その結果、これらのⅢ期の事例においても前期前半と同様に、各地域で構築された竪穴式石槨の構造等において相互に殆ど共通性がみられないことが確認された。また

近接した地域内で時間的に前後関係がある場合でも、系譜的な連続性を追うことが困難な資料が多いことが明らかとなった。他方で、一貴山銚子塚古墳や免ヶ平古墳のように埋葬施設と副葬品配置が葬送儀礼という点で有機的に結びついている事例も確認され、各属性同士の関係を考える上での方向性が見出された。以上のような点を踏まえ、冒頭で挙げたいくつかの論点について検討したい。

４．考察

本稿で課題としていたのは、1)北部九州内の各地の竪穴式石槨において、共通性がどの程度みられるのか、2)同一地域内、あるいは近接した地域同士の間で、前期前半代からの系譜的連続性を追うことが可能か、3)それぞれの竪穴式石槨の系譜は副葬品配置などの葬送儀礼との関係においてどのように説明されるのか、の大きく３点であった。以下、先に3)についての問題を整理し、その上で1)2)の問題をあわせて検討したい。

⑴　副葬品配置からみた竪穴式石槨の導入過程

本稿でみてきた前期後半における竪穴式石槨の構築や埋葬施設の採用の論理については、基本的には前期前半の状況を引き継いだものといえる。その一方で、近畿あるいはその周辺地域との関係についてみた場合、前期前半と比べ、近畿周辺での葬送儀礼を埋葬施設・副葬品配置の２点において忠実に再現するような事例の存在がより顕著となっている。その具体例としては、一貴山銚子塚古墳や免ヶ平古墳が挙げられるが、盗掘等により元来の状況が不明な卯内尺古墳や経塚山古墳も同様の事例であった可能性は高い。そして先にも述べたように、一貴山銚子塚古墳では、近畿系の埋葬施設でもより上位に位置づけられる組合式石棺をモデルとする形で組合式木棺・幅広の竪穴式石槨が構築されている可能性がある。この場合、免ヶ平古墳との間にみられる棺・槨の種類の違いは、副葬品の質・量や墳丘規模の違い（【103m・大型中国鏡２面＋仿製三角縁神獣鏡８面】と【50m・中型中国鏡１面（＋第２主体にもう１面）＋仿製三

角縁神獣鏡１面】）とも連動した現象と理解することが可能である。この２例をみる限り、棺及び槨の採用にあたっては、他地域とのつながりやそこでの階層的位置づけが前期前半と比べてより一層強調されているとみることができる。このことは、以下でも述べるⅣ期以降における初期横穴式石室の成立や埋葬施設による序列化という状況にも一定の影響を与えている可能性がある。

また副葬品配置と埋葬施設が有機的に結びついているとみた場合、すなわちＡ類の副葬品配置・鏡の棺内棺外分離配置が仿製三角縁神獣鏡（棺外）を伴って実施されていることを考えるならば、副葬品の入手とそうした葬送儀礼に関する情報が無関係でなく、相互に密接に結びついたものであった場合が存在したことを示唆する。一貴山銚子塚古墳や免ヶ平古墳はその可能性を示す好例といえよう。この点を踏まえつつ、鏡をはじめとした威信財の流通形態（cf. 辻田2006・2007a・2007b・2009a）と埋葬施設や葬送儀礼全般に関する情報との関係が今後の検討課題であることをあらためて確認しておきたい。

⑵　各地における竪穴式石槨の採用と「在地化」

地域的な問題についても、前稿で検討した前期前半と同様、前期後半においてもあるどこか１つの地域が採用した竪穴式石槨の規範が広く共有されるようなあり方ではなく、各地域独自に、かつその時期ごとに新たな情報を参照・導入することによって構築されていることが明らかとなった。すなわち、想定されるのは複線的かつ複合的な導入過程である。

また本稿でみてきた各地の竪穴式石槨の様相からは、同じ地域であっても前段階に構築された竪穴式石槨の構成要素を全体として継承し発展させるような状況が明確な事例は確認できなかった。このことは、竪穴式石槨の構築に関する限り、各地域・各世代ごとにそのつど最新の情報が更新され、一回性の葬送儀礼が行われるのが基本であったことを示唆している。これについては、そうした一回性の埋葬施設構築への参加機会の稀少性という点が、上記のような地域間での類似性が低いという結果を生み出しているものとも考えられる。ただしその場合でも、頭位方向や基底部構造などについては比較的共通性が高く、

それ以外の属性については古墳ごとでの変異の幅が広いといったように、属性により共有のあり方が異なっている点もあらためて確認しておく必要があろう。また前稿で課題とした「在地化」という観点からすれば、北部九州において竪穴式石槨は、Ⅰ～Ⅲ期までの間は基本的に「在地化」することなく、一貫して「外来の」墓制であり続けたといえよう。すなわち、この段階までの竪穴式石槨は、各世代ごとに在地の社会の「内部」ではなく、そのつど「外部」の情報をモデルとして参照するという意味での「外来」系の墓制であったということである。

以上の点は、問題の所在において述べた、次のⅣ期の段階に出現する初期横穴式石室の展開過程と比較すればその違いがより明瞭となる。すなわち、従来から指摘されているように、初期横穴式石室や竪穴系横口式石室に関しては中期～後期にかけて系統的な変遷を追うことが可能であるが（cf.柳沢1982・2002；重藤2007）、この動きは本稿でみた前期後半（Ⅲ期）までの竪穴式石槨の採用状況とは明らかに異質なあり方である。その意味では、上に述べた「在地化」という点でいえば、北部九州において竪穴式石槨が実質的な意味で「在地化」したといえるのは、次のⅣ期段階の谷口古墳などの広義の初期横穴式石室の成立過程において、その母胎として竪穴式石槨の構築技術（柳沢2002）が選択・採用されたときであったとみることもできよう。そしてそれ以降は、竪穴式石槨そのものとは全く異なる変化の軌跡を描くことになったと考えられるのである。ここにおいて竪穴式石槨の問題は初期横穴式石室成立過程の問題に接続することとなるが、これについては本稿の射程を越えており、稿をあらためて論じたい。

また「在地化」という点では、いわゆる「小竪穴式石室」や「石棺系石室」（山中1974；中間1986；吉留1990；重藤・西1995；山中2005；重藤2007）の系譜および成立過程についても問題である。後者の多くは中期に属すると考えられてきているが、前者については出現時期が前期段階まで遡るかどうかも含めて検討する必要がある。これについても今後の課題としておきたい。

5．結語

以上、本稿では北部九州の前期後半期の竪穴式石槨の実態について検討を行ってきた。その結果についてはここでは繰り返さないが、最後に論じ残したいくつかの課題について述べておきたい。

まず吉留氏（1989）が指摘した福岡平野・筑紫地域・津屋崎-宗像地域における竪穴式石槨の少なさ及び割竹形木棺による序列化の問題と竪穴式石槨導入地域との関係の問題が挙げられる。今回の分析によってもこの傾向自体には大きな変化はないが、本稿でも検討した福岡市卯内尺古墳が竪穴式石槨を有していたとすれば、福岡平野周辺における竪穴式石槨導入を考える上で重要な事例となる。そしてこの卯内尺古墳に隣接して、後続する時期に初期横穴式石室・竪穴系横口式石室の祖型を胚胎する老司古墳が築かれていることも、古墳時代中期への時代転換という点で極めて大きな意味を持つとみられる。これはすなわち、竪穴式石槨の採用から横穴式石室の採用へという転換がこの地域で起っていた可能性を示しているが、ここではこの２つの古墳が福岡平野のみならず、北部九州地域における前期的様相から中期的様相をつなぐものである可能性を確認するにとどめておきたい。

そしてもう１つの問題として、今述べた問題とも密接に関係するが、次のⅣ期における初期横穴式石室・竪穴系横口式石室の成立の問題、及び長持形石棺・舟形石棺などの各種石棺が北部九州においてどのように出現するのかという問題が挙げられる。従来初期横穴式石室の出現過程については、半島からの影響など外部との関係が重視されてきたが、本稿の分析結果を踏まえれば、初期横穴式石室の出現過程が、前期以来の内的な変化の延長上においてどのような意義を持つものであったのかが今後の重要な検討課題となろう。

このほか前期後半期において指摘されている広域的な政治的変動や対外交渉の変遷との関係をはじめ、検討すべき課題は尽きない。これらの多くの問題について、引き続き検討していきたいと考えている。

【謝辞】

本稿に関連する諸問題について日常的に御指導・御教示をいただいております田中良之先生、岩永省三先生、宮本一夫先生、溝口孝司先生、中橋孝博先生、佐藤廉也先生に厚く御礼を申し上げます。また下記に御芳名を掲げる諸先生・諸氏には北部九州の前期古墳全般について、種々御教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

岡田裕之、小田富士雄、久住猛雄、重藤輝行、山中英彦（五十音順、敬称略）

【註】

1：竪穴式石槨に関する研究史全般については山本（1992）・澤田（2009）および前稿を参照願いたい。

2：Ａ類は寺沢知子氏（1979）の農工具副葬位置分類のａ類、Ｂ類は寺沢氏のｂ類とほぼ一致する。

3：竪穴式石槨の「一角」に鏡を副葬ないし埋置するという意味では、奈良県下池山古墳や同柳本大塚古墳の竪穴式石槨の小石室などとの関連も想定されよう。

4：ビワノクマ古墳の竪穴式石槨の調査当時の状況やその後の調査状況については、小田富士雄氏・山中英彦氏に御教示いただいた。

5：ただし、福岡県宗像市東郷高塚古墳の粘土槨などでは排水施設が確認されており、排水施設の情報自体は北部九州にも入っているものとみられる。

6：壁体の立ち上がりが垂直か持ち送りかという点については、近畿周辺の竪穴式石槨では垂直系統の方が大型前方後円墳に採用されていることから、系統差ともに階層差をも示すことが指摘されているが（高松2005）、北部九州の場合も同様に系統差や階層差を示すかどうかについては現在の資料からは明確ではない。

【参考文献】

今尾文昭　1984　「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』６。

今尾文昭　1989　「鏡－副葬品の配列から」『季刊考古学』28。

今尾文昭　1991　「配列の意味」『古墳時代の研究８　副葬品』。

今尾文昭　1993　「古墳と鏡」『季刊考古学』43。

宇垣匡雅　1997　「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44-1。

岩本　崇　2004　「副葬配置からみた三角縁神獣鏡と前期古墳」『古代』116。

梅原末治　1923　「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」『考古学雑誌』14-3。

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986 「免ヶ平古墳 発掘報告書」『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』３。
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1991 『免ヶ平古墳 史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書』。
小田富士雄　1966 「九州」『日本の考古学Ⅳ 古墳時代（上）』、河出書房。
小田富士雄　1970 「畿内型古墳の伝播」『古代の日本３　九州』、角川書店。
小田富士雄　1980 「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座４』。
小田富士雄　1986 「第３章　考察」『免ヶ平古墳 発掘報告書』、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要Vol.3。
鏡山　猛　1959 「福岡県行橋市琵琶隈古墳」『日本考古学年報』８。
蒲原宏行　1983 「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』、雄山閣。
久住猛雄　2002 「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』、日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会。
久住猛雄　2006 「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会。
小林行雄　1941 「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』（小林1976 所収）。
小林行雄　1976 『古墳文化論考』、平凡社。
小林行雄・有光教一・森貞次郎　1952 「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第16輯 史蹟之部、福岡県教育委員会。
近藤義郎　1983 『前方後円墳の時代』、岩波書店。
㈶大阪府文化財センター編　2008 『埋葬施設からみた弥生墳丘墓と前期古墳』。
㈶向日市埋蔵文化財センター　2001 『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ 第６次調査報告編』、向日丘陵古墳群調査研究報告第１冊。
澤田秀実　2009 「竪穴式石槨研究の現状と課題」『季刊考古学』106、雄山閣。
重藤輝行　2007 「埋葬施設－その変化と階層性・地域性－」『九州島における中期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会。
重藤輝行・西健一郎　1995 「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性－東部の前期・中期古墳を例として－」『日本考古学』２。
菅谷文則　1980 「三角縁神獣鏡をめぐる諸問題」上田正昭他編『ゼミナール古代日本史』下、光文社。
清家　章　1996 「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究 考察篇』、八日市市教育委員会。
高松雅文　2005 「竪穴式石室の編年的研究－畿内地域を対象として－」『待兼山考古学論集』、大阪大学考古学研究室。

田平徳栄　1980　「総括」『経塚山古墳』、浜玉町文化財調査報告書第１集。
辻田淳一郎　2006　「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論－プロセス・モデル・アイデンティティ－』、すいれん舎。
辻田淳一郎　2007a　「古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理－北部九州地域を対象として－」『史淵』144。
辻田淳一郎　2007b　『鏡と初期ヤマト政権』、すいれん舎。
辻田淳一郎　2009a　「九州出土の腕輪形石製品」岩永省三・田尻義了編『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』、九州大学総合研究博物館。
辻田淳一郎　2009b　「北部九州における竪穴式石槨の出現」『史淵』146。
辻田淳一郎　2009c　「久里双水古墳出土盤龍鏡の諸問題」『久里双水古墳』、唐津市文化財調査報告書第95集。
都出比呂志　1986　『竪穴式石室の地域性の研究』（都出2005に所収）。
都出比呂志　1991　「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱－」『日本史研究』343。
都出比呂志　2005　『前方後円墳と社会』、塙書房。
寺沢知子　1979　「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』４。
中間研志　1986　「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』６・中巻、福岡県教育委員会。
橋本達也　1996　「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究 考察篇』、八日市市教育委員会。
土生田純之　1998　『黄泉国の成立』、学生社。
浜玉町教育委員会　1980　『経塚山古墳』、浜玉町文化財調査報告書第１集。
福岡市教育委員会　1992　『山ノ鼻１号墳』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集。
福岡市教育委員会　2001　『卯内尺古墳』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第690集。
福永伸哉　1994　「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』41-1。
福永伸哉　1995　「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』、大阪大学文学部考古学研究室。
福永伸哉　1999　「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』46-2。
福永伸哉　2005　『三角縁神獣鏡の研究』、大阪大学出版会。
藤井康隆　2001　「向日丘陵前期古墳群の竪穴式石槨について」『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ　第６次調査報告編』、向日丘陵古墳群調査研究報告第１冊。
藤田和尊　1993b　「鏡の副葬位置からみた前期古墳」『考古学研究』39-4。
北條芳隆　1990　「古墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』37-2。
北條芳隆　1999　「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』、大阪大学文学部考古学研究室。

北條芳隆　2000　「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』、青木書店。
松浦宥一郎　1994　「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』29。
光本　順　2001　「古墳の副葬品配置におけるものと身体の分類及びその論理」『考古学研究』48-1。
森　浩一　1978　「日本の遺跡と銅鏡」『日本古代文化の探求　鏡』、日本思想社。
柳沢一男　1982　「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』。
柳沢一男　1986　「総括」『丸隈山古墳Ⅱ』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集。
柳沢一男　2002　「横穴式石室の検討」『鋤崎古墳』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集。
柳田康雄　2001　「Ⅲ まとめ」『城山遺跡群Ⅳ』、夜須町文化財調査報告書第54集。
山中英彦　1974　「第３章 総括」『東宮ノ尾古墳群』、北九州市文化財調査報告書第14集。
山中英彦　2005　「豊前地方の竪穴系横口式石室について」『稲童古墳群』、行橋市文化財調査報告書第32集。
山本三郎　1980　「畿内における古墳時代前期の政治動向についての視点―埋葬施設の構造を中心として―」『ヒストリア』87。
山本三郎　1992　「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究７』、雄山閣。
行橋市教育委員会　2005　『稲童古墳群』、行橋市文化財調査報告書第32集。
用田政晴　1980　「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』27-3。
吉留秀敏　1989　「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』20（中）。
吉留秀敏　1990　「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』36-4。
吉留秀敏　1991　「前期古墳と階層秩序」『古文化談叢』26。
吉留秀敏　1995　「九州の前期前方後円墳」『前期前方後円墳の再検討』、埋蔵文化財研究会。
吉留秀敏　2000　「筑前地域の古墳の出現」『古墳発生期の社会像』、九州古文化研究会。

【挿図出典】

図１・表１：筆者作成。図２：浜玉町教育委員会（1980）、図３：小林ほか（1952）、図４：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（1986）、図５：鏡山（1959）より、いずれも改変引用。